



令和7年6月

スクールカウンセラー 中野隆治



「希望への道」



朝ドラ『あんぱん』の主人公のモデルであり、アニメ『アンパンマン』の作者でもある漫画家・詩人やなせたかしの詩にこういう作品があります。

絶望のとなりに／だれかが／そっと腰かけた

絶望は／となりのひとに聞いた

「あなたはいったい誰ですか」

となりのひとはほほえんだ

「私の名前は／希望です」

(やなせたかし『絶望のとなり』)

誰だって一生に一度は、希望を見失い、生き続けることの困難さに出会うことがあるかもしれません。肉親や最愛の人の悲劇に出会ったり、自分自身の挫折^{させつ}を味わったり、裏切り^{ぎせつ}に出会ったり、様々な形の予期せぬ未来が人を襲うことはあり得るかもしれないのです。そんな時、人は絶望という、自己ジレンマに陥^{おちい}ってしまうものです。

そんな時、どのようにして、自分を絶望の淵^{ふち}から救い上げることができるのか。作者は、気軽に、絶望の隣のベンチには、希望が座っていて、さり気なくほほえんでくれると言います。つまり、絶望と希望は、いつも隣同士に座っているといたいのでしょうか。自分の気持ち次第で、悩みぬいたあげくのその先に希望が見えてくるというのではなくて、ひょいと隣を見ると、希望がほほえんでいるのかもしれません。

その希望は色々な形で、悩んでいる人の前に姿を現してくると思われれます。普段は大人しい目立たない友人の形を取って、あるいは、日頃は無口などこか地味そうに見える先生の形を取って、あるいは、いつも目の前を颯爽^{さつそう}と歩く先輩の形を借りて。もしかして、手にしている読みかけの一冊の本の姿をしているかもしれません。

希望はどこにでも存在しているのではないのでしょうか。みなさんが目にする街の情景の一コマ^{ひと}一コマ^{ひと}に希望の芽が見え隠れしているかもしれないのです。人が生きるという、その行為自体が、実は希望のための営み^{いとな}だと思いませんか。絶望しても、すぐ近くに希望がある……そう思えば、人が生きるのに、そんなに大きく思い悩むことはないかもしれません。

今日も、希望を生きている人々の姿、街の姿、学校の姿に、目に捉^{とら}えられるあらゆる存在に、心優しく触れてみて下さい。希望に満ちた道のりが、今日から明日にかけて、一筋の鮮やかな直線となっているのに気づくはずです。

その一筋の道を、着実に一步一步踏みしめて歩いて行くのです。それは希望への道です。